

## 本賞 &amp; 制作賞

## よみがえる話芸 節談説教

東海ラジオ放送訪問記

金田一 秀穂



落語や講談など日本の話芸の源流といわれる「<sup>ふしだんせつきょう</sup>節談説教」。僧侶が信者に仏教の教えを説くために言葉に節（抑揚）をつけ、美声とジェスチャーで聴衆の感覚に訴える説教のことで、その実像と魅力に迫った『よみがえる話芸 節談説教』で本賞と制作賞を受賞した秋田和典プロデューサーを名古屋にたずねた。

## 声の力

今年のラジオ部門の本賞は、東海ラジオ放送制作の『よみがえる話芸 節談説教』だった。祖父江省念という最後の節談説教使をめぐって、その愛孫である祖父江佳乃さんが、その志を継ぐべく頑張っていることを、女流講談師である神田京子さんが訊き、語る。

私たちは言葉を載せる「声」という媒体をふだんあまり意識していない。何も考えずにふつうに使って、それを変化させること、そこに特別な感情を汲み取ることを、意識的に行うことはほとんどない。しかし、ラジオは、音だけの世界であり、そこに登場する人々は、姿かたちが一切なく、否も応もなく、声だけで判断されてしまう。どのような声で語られるか、そこでどのように言葉が使われるか、ということが、良質な番組を作る非常に大きな決め手になる。

ラジオを聴いていると、練り上げられた声と、素人の声を簡単に区別できるようになる。よく鍛えられた声は、圧倒的な力を持ち、それによって語られる言葉がとても心地よいものになる。いわば声の芸のようなものがあるように思うのだが、それを実証するように、この番組は、声の持つ凄みを伝えてくれた。

審査員全員一致でこの番組が推されたのは、故ないことではない。声の力をおぎなりにしている番組があまりに多いなかで、省念師の素晴らしい声は言



秋田 和典 さん（あきた かずのり）

東海ラジオ放送制作局制作部

1950年愛知県出身。73年入社。『さんさんモーニング』『ぶっつけワイド』『ミッドナイト東海』など多くの人気ワイド番組を担当。『太夫と才蔵の村』で平成20年民間放送連盟賞ラジオ教養部門優秀賞、『詩人、城山三郎が遺したことば』で平成21年度文化庁芸術祭ラジオ部門ドキュメンタリーの部優秀賞を受賞。『よみがえる話芸 節談説教』は平成24年度文化庁芸術祭ラジオ部門大賞も受賞。

うまでもなく、佳乃さん、神田さん、また少しだけ流れる小沢昭一氏の声は、聞いている者の耳を一瞬にしてしっかりと奪い、引き込んでいった。



金田一 秀穂 さん（きんだいち ひでほ）

ラジオ番組審査委員長

### 節談説教と祖父江省念

猛暑の続く某日、大相撲が終わって間もない名古屋を訪ねた。

最初に東海ラジオ放送に行って、制作者の秋田和典氏に話を伺う。

2011年の秋に、アーカイブで1996年に亡くなられた祖父江省念師の節談説教のテープを発見したところから制作が始まった、という。

このようなアーカイブは、放送局の宝物である。録音し、放送した当時にはその価値が分からなかったものも、その後の年月を経るにつれて、きわめて貴重なものになっている可能性がある。放送局各社の意欲あるディレクターたちは、一度資料室を漁ってみるといい。飛躍へのヒントが見つかるかもしれない、とお話を聞いていて思う。

幸いなことに、民間芸能研究者であり、節談説教研究の第一人者だった佛教大学名誉教授関山和夫先生の協力を得ることができた。先生は今年5月9日に84歳で亡くなられた。これが最後のお仕事なられた。仏教で言う因縁のようなものを感じる。

節談説教は、お寺で行われる。仏教の教えを分かりやすく面白く、唄うようにして伝えるものだった。笑わせたり泣かせたりしながら、最後には仏様のありがたい功德を唄って語る。聴衆は善男善女。当時の省念師の録音を聴いていると、お堂をいっぱい埋めた信者さんたちが、感極まって、「ナンマイダブ、ナンマイダブ」の合唱が澎湃と沸き起こるのだ。圧巻である。

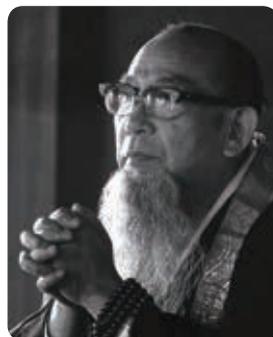
説教をするのは僧侶であるから、宗教活動なのだが、その大衆性から、浪曲やテロレン節などの、民間芸能の祖形とも考えられている。一時期、小沢昭一氏や永六輔氏の放浪芸発掘ブームなどで脚光を浴びた。名古屋は、民間話芸が盛んな土地である。平家琵琶や三河万歳などが有名だが、節談説教も、各所でふつうに行われていたという。

そんなことを教えてもらってから、省念師の孫であり、今や数少ない説教使でしかも女性である佳乃さんに会いに行った。場所は省念師の有隣寺のそばの“志ら玉”という、古民家を移築した料亭の奥座敷で、フグの煮凝りをはじめとする、いかにも夏らしい涼しげな会席をいただく。

省念師もこの店の常連で、一家とは昔から家族ぐるみのお付き合いをされていた方たちである。おかみさんも交えて、省念師生前のさまざまなお話を聞くことができた。

そもそも節談説教は、仏教伝来の頃から行われたという。仏教の大衆化に力があって、昭和の初めごろまでは、全国に説教所があって、有名無名の説教使たちが人気を競うようなものだったという。綾小路きみまろのライブのようだとしたら叱られるかもしれないのだが、どうも雰囲気はそれに近いと想像される。有隣寺で省念師の説教が開かれる日には、朝早くから熱心な人々が集まって、夕方まで話を聞いて帰っていく。昼の休憩にはうどんが出たりしたという。

ただ、そのような大衆性は仏教の通俗化を招くというので、戦後は衰退していく。その時代に省念師は、「日本仏教伝統の節談説教を現代に継承する正統説教者」（関山和夫『説教』1974）の最後の一人として活躍した。



祖父江省念師



祖父江佳乃さん

何よりもその声が素晴らしい。養老の滝に向かって発声して独特のしわがれ声を作ったというが、そのような話は、演歌歌手たちの苦勞話としてよく聞く。しかし潰れてしわがれているだけでは魅力がない。声に艶がなければならぬのだと師は言っていたという。たしかにその声は独特で、いちばん似ているのはモンゴルのホーミーという発声法である。あるいはブルガリアンコーラスが似ている。徹底的に強い地声である。アメ横の魚屋さんの呼び声にも近い。

「一こえ、二ふし、三おとこ」と省念師は佳乃さんに教えたという。説教使として一番大事なものは声の良さ、次に節回しの上手さ、そうして見てくれの良さも大事であると。いわばルックスである。

省念師の写真が残っている。立派なひげを蓄えられて、威厳がある。しかも目は優しげで、どこか洒脱で俗にも通じていながら、あくまでも高僧としての脱俗の気品がある。演者であると同時に演出家として、さまざまな工夫や計算をされたのだろう。

晩年、省念師は目を悪くされたのだが、佳乃さんは、地方の会場で高座に上がる先導者として、いつもついていった。そのことが、節談説教を継ぐきっかけになっているという。当時、省念師は人気抜群で、誰もが師の手を引ききたがった。それで、可愛らしい孫娘が手を引けば、誰もが納得した。今でもそのことを覚えている地方の人たちは、佳乃さんが説教に行くと、可愛がってくれ、応援してくれるという。ありがたいことである。

不世出の名人と言われた祖父の後を継ぐことに、特別なプレッシャーはなかった、と佳乃さんは言う。女だからということもあるのでしょうか、何よりも、おじいちゃんの後継ぎというより、おじいちゃんが一番のファンであるという姿勢が、気構えを楽しんでいるのではなかろうかと、筆者は愚考する。

### 生まれるものと、消えていくもの

食事を終えて、近所の有隣寺へ案内された。

有隣寺は住宅街の中の、近代的なお寺である。コンクリートでつくられて、幼稚園が併設されている。いわゆるお寺の情緒はないが、地域の中にしっかり根差して、現役でバリバリ活動している宗教施設であることを感じさせて、好感が持てる。



有隣寺外観

階上に本堂があつて、正面左側に説教使の座る高座が作られている。明るく、清潔である。禅宗の寺などと違って、内陣が広くない。信徒の座る席である外陣がひろびろと取られている。ここで、省念師の説教が週一回開かれたという。

外陣を埋めた人々の間を、竿の先に籠をつけたものを小僧さんたちが持つて回る。お布施を集めるのである。

また、本堂の裏には古い建物が残されていた。かつて小沢昭一さんは、そこに一月泊りがけて省念師の弟子入りをして、節談説教の修行をされたのだと聞く。小沢昭一氏も、今はない。



内陣



外陣

大切な人々の死と一緒に、伝統が次々と消えていく。なんでも残せというわけではない。新しく生まれるものがあるのだから、消えていって仕方がないものもあるわけだ。しかし、何も知らないうちにいつの間にか消えていってしまうのは残念である。消えていってもいいのかどうか、その判断は一つ一つしておきたいと思う。

節談説教は、お寺の宗教活動として、大変重要な活力あるものだった。葬式仏教とか、観光仏教として生き残ることだけが、お寺さんのすることではあるまい。日本人の精神生活の現代と未来において、仏教の出来ることは非常に多いのではないか。その一つとして、佳乃さんがしようとしていることは、一石になるのではなかろうか。そんなことを感じながら、猛暑の名古屋を後にした。